論コミ通信4月号

SFCフォーラムと高校をつなぐ情報紙

発行：
SFCフォーラム
論理コミュニケーション教育部門
2019年4月6日（土）
vol.6

論理コミュニケーション（以下、論コミ）実施校の先生方、改めましてこんにちは。高校窓口担当の上野です。 今年もあっという間に3ヶ月が過ぎ、新年度となりました。学生のみなさんも先生方も新たな気持ちになられているかと思います。
論理コミュニケーション教育部門は、文学博士号をもつ伊藤先生を新たな仲間に加え、2019年度も開発と実践の両輪を回し続けます。今回は、論コミ通信で取り上げて欲しいという要望が多かった、検定の返却方法事例についてまとめています。また、伊藤先生には導入校へのみなさんへのご挨拶もかねて、コラムを執筆頂きました。

実施校の事例紹介 ～「論述力検定」の返却方法～

検定の返却について、長年論理コミュニケーションを担当してくださっている3人の先生方にヒアリングさせていただきました。長崎南山高校の秀島先生、鈴鹿高校の染井先生、元東筑高校の井上先生（ 現SFCフォーラム研究員；高大連携として昨年度は東筑高校での授業も一部支援）です。

■事例1：長崎南山高校1年生
（公式15コマシラバス+検定返却に合わせた学年集会1コマを実施）

本校は、2018年度からDVD教材を使って、高校1年生の「論理コミュニケーション」を行っています。以前は、国語科の教員が直接「論理コミュニケーション」の授業を行っていましたが、負担が大きく、課題になっていました。そこで、DVD教材を用いた授業に切り替えることで、教職員の負担軽減と授業の品質の安定化を図りました。さらに、様々な教科の先生方に授業を担当頂くことで生徒とともに「論理コミュニケーション」の理解を深めて頂き、各教科の授業等においても設計図を利用して頂きたいという考えもありました。しかし、はじめての実践形態で進めた昨年に関しては、生徒の抱く疑問点の解消が十分にできなかったり、「論理コミュニケーション」の意義について定期的に伝えたりすることができないという問題が起きました。そこで、「検定返却日」をこの状況に対応するために施策日と捉え、高校1年生全員を対象に集会を開くことにしました。なぜなら、検定返却日は高校1年生が自身の「論理コミュニケーション力」を知る機会になり、そして、今後のモチベーションに影響する日でもあると考えているからです。

長崎南山高校
秀島先生

授業では、当時、高校3年生でAO入試（国立大・私立大）と公務員試験に合格した生徒3名に参加してもらい、各試験で「論理コミュニケーション」がどのように活かされたのかを説明してもらい、私からは大学や社会でこの力がさらに生きていくことを補足説明しました。そして最後に、設計図の書き方と重要なポイントをできるだけ簡単に伝え、「文章完成よりもまずは設計図が大切である」ということを強く伝えました。結果として、高校1年生の反応からも、身近な先輩の体験談を聞くことができたのは大きな意味があったと感じています。
検定返却に関しては、生徒が「今後も論理コミュニケーションを頑張ろう」という気持ちと各自の弱点克服の第一歩にすることが重要であると考えています。

今年度は、前半に15コマを終わらせ、後半では設計図を用いた探求学習への応用を考えています。

■事例2：鈴鹿高校1年生
（公式28コマ～シラバス+発表会を実施）

Q：論述力検定が返却された際、返却にあたってどの部分を重点的に見られていますか？
A：フィードバックシート（FBS）の一番下の個別コメントを全員分ざっと見ます。評価項目4（事例）ができてないことが多いのですが、ここがDの生徒にたいしてどのようなコメントが書かれているかを確認することが多いです。その際、コメントが理解できない時は、生徒の書いた設計図・文章も見て確認しています。私が十分に理解できていないと感じた時は、この時点でSFCフォーラムに問い合わせ、確認することもあります。

Q：返却は授業内でされていますか？ その際、どのような解説をされていますか？
A：はい。授業内でしています。返却・解説に20分ぐらい使い、次の授業に入るイメージです。全体への解説として、（教員向け返却物の）「成績一覧」にある総評コメントを参考に、今回の結果、良いところ、改善すべきところを伝えます。だいたいは、その課題が次の授業内容に当てはまるので、該当箇所の授業用板書スライドを抜粋して返却時に使うことが多いです。

Q：返却時に工夫しているところを教えてください。
A：生徒には、FBSと自分の文章を見比べて自分で赤入れをさせています。具体的には、FBSでDの評価項目の部分や、個別コメントでアドバイスされた部分、解説書にある設計図との違い、などです。ただ、中にはわからないままになっている子もいると感じています。そこのフォローは課題で、改善方法を模索しています。

鈴鹿高校 染井先生

今年度は、2年生を受け持つため、国語科などを通して、設計図を書く機会をできるだけ多く設け、まずは身につけた論コミ力の維持を図りたいと考えています。

■事例3：福岡県立東筑高校1年生
（公式15コマシラバス+検定返却時に2コマ分追加。その後、議論会を実施）

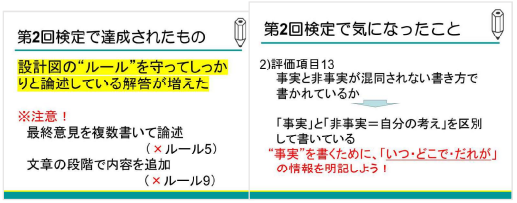
私（井上）が、「論述検定振り返り」で大事にしていることは3点あります。

1. 達成できているところは何か。ここは、検定で示されている全体評価だけでなく、授業中の態度や意欲、そして過年度の先輩達の取り組みとも比較して伝えます。
2. 未達成の部分はどこか。つまり、次回以降取り組む課題の提示です。第2回以降では、前回できていて今回出来ていなかった点なども伝えます。ここは、SFCフォーラムから送ってくる全体評価の中のポイントを中心に伝えます。ポイントを絞り込まないと生徒には伝わらないので、フォーラムの振り返り資料はとても有効です。その際、評価データをグラフ化したり（過年度比較も含め）、生徒の例をあげて具体的に説明したりします。
3. 可能な限り、生徒個々人の評価表や設計図を読んで代表的なものを（その時点で優れていると判断されるものを生徒の許可をとって）全体に伝えます。

これらとは別に、今年度は、1学年担当の先生にも振り返りの授業でコメントを貰いました。そのとき、クラス全員の評価表を見た上でのコメントを頂き、生徒は担任がきちんと読んでいることに感動し、食い入るように話を聞いていました。

おわかりの通り、大切にしているのは全体での振り返りを通して、個々人の評価表の読み返しに繋がるように仕向けていることです。生徒個々人はそれぞれの評価表を読めば分かりますが、読まない生徒もいます。ですから、私が説明した後には時間をとって、自分の評価表を読ませます。印象的なのは、振り返りの時間が終わると、何人かの生徒が評価表を持って、自分の改善点なり、評価表のコメントの解説を求めにくることです。全体と個。この両方が相俟って「論理コミュニケーション」が着実に身につくようです。

（井上 孝志）



検定2回目返却時に使用したスライドの一部

論述力育成

先日、長らく論理コミュニケーションへ応援を頂き、拙書『論理コミュニケーション トータルロジックス特別版』にも書評を頂いた早稲田大学吉江修先生と大学で必要な論述力について話をする機会を得ました。議論の論点は、「大学では、意見ありきで、根拠が後付けと言う意見主張は論述力とは言わない。根拠に支えられた意見を選ぶという行為の存在は、この根拠ではこの主張は出来ないという研究の気づきになり、その気づきが研究の発展を生む」というものでした。つまり、「論理コミュニケーション」における“ルール5”は、大学での研究の最初の重要なピースだと確認しました。
しかし、時間が無い時、十分な観察や実験や文献読解を出来ない時など、論述における制約が厳しい時、学生だけではなく、多くのヒトは、この“ルール5”が出来なくなります。これは、情報の世界でも言えます。SNSは何でも言ってもよいのではありません。根拠を説明する事例(Evidence)が無い根拠、根拠で支えられない意見の発信を控える。これをSNSの利用者が守れば、SNSは今より社会に役立つ道具になるはずです。

意見が先に有り、根拠と根拠を説明する事例が後に来るという意見主張 （意見→根拠・事例）	×大学が求める論述ではない
根拠と根拠を説明する事例が先にあり、意見が後に来るという意見主張 （根拠・事例→意見）	○大学が求める論述≒「論理コミュニケーション」の系譜

梅嶋 真樹（慶應義塾大学グローバルリサーチインスティチュート/大学院政策メディア研究科特任准教授、マレーシア工科大学客員教授）

コラム ～ 論コミを大学への架け橋に ～

今年度よりSFCフォーラムで検定業務を担当することになりました伊藤有紗です。論理コミュニケーションとの最初の出会いは、鈴鹿高校でした。当時、高校では国語科や論コミの授業を教えながら大学の講師も兼任していた私は、大学に入学した学生たちが1つの壁にぶち当たっていることに気づきました。
1つの壁とは「大学の求めるレポートの書き方と、高校まで学んできたレポートの書き方の違い」でした。「なぜ、大学では結論を先に述べるのか」「引用はどう書くのか」「先行研究って何?!どうやって探すの?! 」私の演習の授業は、その違いを教え、大学の求めるレポートを書けるようにすることが目標でした。しかし、その授業が終わる前にも他の授業ではレポートが出ることもあります。このような状況を目の当たりにして、私はこの差を急に埋めるというのは、なかなか難しいと感じていました。一方、鈴鹿高校ではいち早く論コミを取り入れ、卒業生においても論コミが大学でのレポートを書くのに役立っていると聞く機会がありました。大学と高校の違いに戸惑っている学生を減らすためにも、高校生活における論コミの取り組みは大きな意味を持つと感じています。検定業務に携わることで、今までとは違った角度から論コミと関わっていきたいと思います。

伊藤 有紗